



# 本の木の森



## 第1部 森の木の家

堀田耕介

## 本の木の森

堀田耕介

### 第一部 森の木の家

「それじゃあ、レイくん。先生帰るから。気が向いたら学校に来てね。みんな待ってるから。」

「レイ、出てらっしゃい。先生お帰りになるわよ。」

玄関で先生とお母さんの声がする。ぼくは出て行かない。ぼくは本を読んでいるのだ。

「もう、仕方がない子ね。レイー！」

「いいですよ、お母さん。私はここで失礼します。」  
「すみません、ご迷惑をおかけして。いつもありがとうございます。」

きつとお母さんは玄関で座って頭を下げている。先生は紺のスーツに紺のパンプス。赤い縁のメガネをかけてブラウスの白い襟をスーツの襟もとから出している。照れたような顔をしてお母さんに顔を上げてください、という動作をしているだろう。やがて玄関の扉が開く音がして、閉じる音がする。ぼくは二階の窓から外をのぞき、遠ざかっていく先

生の後ろ姿を見る。ぼくはふうつと息を吐いて、本の続きを読み始める。

お母さんが部屋をノックする。

「レイ、ちよつといい？」

「いま本を読んでいるから。」

「あなたいつだって読んでるじゃないの。」

「あとで。」

「あとでって、いつよ。」

「この本を読み終わったら。」



「あと何ページなの？」

「読み始めたばかりだから、あと五〇〇ページくらい。」

「もう。途中にして出てきなさいよ。」

「だめ。」

「先生が心配して来てくださったんだから、明日は学校へ行ってちょうだい。」

「先生にはちゃんと顔を見せたじゃない。元気でいますよって。」

「学校へ行かないで元気も何もないわよ。」

「だってこの本が面白いんだもん。」

「もう三回目よ、新学期になってから。」

「あの先生美人だよ。紺のスーツも似合ってたし、赤い眼鏡もかわいかった。」

「何言ってるのよ。」

「ぼくは別に、先生が気に入らないから学校へ行かないんじゃないんだよ。」

「じゃあ何で行かないの？」

「本の方が面白いんだもん。学校でやってることはつまらないことばかり。」

「あなたが面白くないと思っっているから面白くないんじゃないの。お母さんは学校、楽しかったわよ。」  
「でもぼくには楽しくないの！」

ぼくは腹を立てる。お母さんはあきらめる。  
「とにかく晩御飯の時は出て来てちょうだい。」  
「はい。」

お母さんの足音が去っていく。気配がなくなったのを見計らって、ぼくはドアを開けて、トイレに行く。

「まったく、なんだって学校なんか行かなきゃなんないんだよな。学校でやることなんかつまらないことばかりだし、面白いやつも一人もない。先生は美人でまじめだけど、みんな言うこと聞かないしな。あんなところ行くより、うちで本読んでた方がずっと楽しいのに。」

ぼくは教室の風景を思い出す。先生は「大事なこと」を言っているのにほとんどの生徒は聞いていない。勝手に教室を出入りしたり、勝手にけんかを始めたりする。

ぼくは思わず立ちあがって、「先生の話の聞けよ！」と大声を出しそうになった。まわりのやつはちよつとびくつとした。でも立ってみると、こんなやつらに何を言ってもムダだ、という気持ちが起こってきて、何も言わないで座ってしまった。胸がどきどきしていた。先生はぼくの方を見て戸惑った顔をした。でも、うなずいて微笑んでくれた。ぼくはなんだか自分のことがとても嫌になってしまって、そのあとずっと机の上に突っ伏して、その時間が終わったら帰ってしまったんだ。

……ああ、つまらないことを思い出した。あれからぼくは、学校へ行っていない。

ぼくはトイレの窓から外を見る。いい天気だ。こんな日はどこかへ行きたいな。でもお母さんがいる間は抜け出せない。脱走するのは夜になってからにしよう。

ぼくは部屋に戻って本の続きを読み始める。

今読んでいるのは、「本の木の森」という物語だ。どこか遠くのこの世じゃない世界の丘の上に、一本

の大きな胡桃の木が立っている。でもその木は普通の木じゃない。胡桃の実もたくさんなるんだけど、その木に登って高いところへ行くと、そこには本がなっているんだ。

それは、この世に一冊しかない本。不思議な言葉で書かれた不思議な数学の本があったり、暗号で書かれた魔法の本があったり。海に見える街に住んでる白い服を着た女の子の話や、本をすべて燃やしつくしてしまう、赤い三角の頭巾を被った不思議な集団の話が書かれていたりする。本をす

べて燃やしつくしてしまっただって？ぼくは身震いした。そんなことをされたら、ぼくはどんなに辛いだろう。

ぼくはその物語を夢中になって読む。本の木の生えている丘の麓には森が広がっていて、「本の木の森」と呼ばれている。そこには小さな一軒家があって、パイプをくわえてひげもじやの黒い眼鏡をかけたおじさんが住んでいて、壁一面の本棚にいっぱいの本があつて、そこに来る人はみんなおじさんの入れたコーヒーを飲みながら、静かに本を読んでいる



んだ。

いいなあ、そんな森の家で、好きな本を読んでいられたら、どんなに幸せだろう。この部屋の中で本を読んでいるのは楽しくないことはないけど、一歩この部屋を出たらいやなことばかり。どんなに天気の良い日だって、嫌な奴がぼくを見つけてぼくのこゝとを笑うかもしれないと思うと、外に出る気がなくなってしまう。いいなあ。そんな森へ行けたらいいのに。

「晩御飯よー。」

お母さんの声ができる。いつの間に時間が経ったんだらう。いいところなんだけどな。でも晩御飯は食べるのと約束したから、仕方ない。ぼくは本を持ったままダイニングへ行ってテーブルの上に本を広げて続きを読む。

「また本を読みながら食べる気？」

「だって面白いんだもん。」

「そんなに面白いかしらね、本。」

「面白いよ。お母さんだって読んだことあるでしょ、

本。」

「また馬鹿にして。あなたが小さい頃、毎晩読んであげたでしょ。」

「でもいつも、お話の途中でお母さんが寝ちゃったじゃない。」

お母さんは苦笑いする。

「ぼくが「続きは？ねえ、読んでよ」って言っても、全然起きないんだもん。仕方ないからぼく、自分で読むようになったんじゃない。」

「レイは文字を覚えるの早かったもんね。お母さん

のおかげじゃない。」

「ちえっ。自分に都合のいいように言うんだから。」

「あのころはよかったわね。お父さんも家にいて、お友だちもよく遊びに来て。文字を覚えたのも、ゆいちゃんと積み木遊びをしてたからでしょ。」

「うん。積木の表に「い」って書いてあって、うらに犬の絵と「いぬ」っていう字が書いてあって、あれで平仮名を全部覚えたよ。」

「そうね。覚えたてのころはお父さんの車で出かけると、看板の文字を全部読んでたもんね。」

「ひらがなしか読めなかったけど。」

「だから最初は、何を読んでものか全然わからなかったわ。」

「「ダンスにゴン」の「に」しか読めなかったからね。」

「おつかしかかったわ。でも読めない字があると、いつも「何て読むの？」って聞いてたもんね。あつという間に私より漢字も読めるようになって。」

「お母さんは漢字を知らなさすぎるよ。お父さんがいるときはお父さんに聞いたけど、お父さんが帰って来なくなっただけからは誰も教えてくれないんだか

ら。だから仕方ないから、全部自分で調べるようになったんだよ。七歳の誕生日に「こうじえん」を買ってもらって、あれで調べたらどんな字でも読めるようになったから。」

「そうね。」

お母さんは両手で頬杖をついて、どこか遠くを見ている。こういうときお母さんはお父さんのことを考えているのだ。

「お父さんはまだ帰って来ないの？」

「そうね。また予定がのびたみたい。」

「ふうん。」

ぼくは、なぜか腹を立て、ご飯をかきこむ。

「ごちそうさま。」

「もう終わり？」

「うん、もう十分。」

「お父さんも心配してたわよ。レイが学校へ行っていないこと。」

「お父さんは心配しないよ。ぼくは嫌だから学校へ行かないんじゃないって言ったもん。ぼくは本を読んでる方が好きだから学校へ行かないんだから。」

「困ったわね。」

お母さんはため息をつく。

お父さんは鉾山技師だ。遠い国の、深い深い穴の底で、モリブデンという金属を掘っている。モリブデン、って変な名前だな。森の中の、ぶでつと太った変な王様の名前みたい。お父さんがスコップで、ぶでつと太った変な王様をたくさん掘り出しているところを想像したら、ちよつとおかしくなった。

「大人はいいなあ。いろんな所へ行けて。子どもって



なんでこんなに不自由なんだろ。」

ぼくは窓を開けて外を眺める。もう夕日も沈んで、すっかり暗くなっている。街の灯が遠くまで続いているのが見える。

「ゆいちゃんかあ。」

ぼくは小さい頃、隣の家に住んでいたお姉さんのことを思い出す。ぼくは一人っ子だから兄弟はいないけど、近所のお兄さんお姉さんにはかわいがられて、いつも一緒に遊んでいた。鬼ごっこをしたり、積み木で遊んだり。一度道路で鬼ごっこをしてい

たらぼくがバイクにはねられて、大けがをしたことがあつた。あのときはお父さんが慌ててぼくを病院に運んでくれた。ゆいちゃんは病院までついて来て、ずっと泣き続けていたのを思い出す。ぼくは痛くて苦しくて泣いたり叫んだりしてたけど、ゆいちゃんの泣き声が聞こえて「ゆいちゃん、泣かないで」って思ったら、急に泣く気がなくなって、それからじつと我慢した。そしたら、「偉いぞ、男の子は泣くもんじゃない」ってお医者さんに褒められた。

あの事故があつてしばらくして、ぼくの家は今の

街に引っ越して来た。だからゆいちゃんともその時別れたつきりだ。ゆいちゃん、どうしてるんだろうな。

居間から聞こえていたテレビの音が消える。そつとドアを開けてみる。まだ物音がする。ぼくはトイレに行つて、窓の外を見る。夜の空の遠くの方に飛んでいる、飛行機の点滅する光が見える。トイレを出て気配をうかがうと、あたりはしんとしている。お母さんも寝たらしい。もう少したつたら、脱走しよう。

一〇分後、ぼくは脱出に成功した。「本の木の森」を肩掛けかばんに入れて、ぼくは夜の街へ飛び出す。誰もいない。気持ちいい。夜の住宅地を走る。ああ、生きてるなって思う。一つ先の角に、自転車の明かりが見える。おまわりさんだ。ぼくはあわてて角を曲がる。ぼくは走って公園まで行き、息を切らしてブランコに座る。このブランコは、ちょうど街灯の光が当って、夜でも本が読めるのだ。ぼくの秘密の場所の一つ。ぼくはまた、「本の木の森」を

開けて、集中して読み始める。

一〇月になって、昼はまだ暖かいけど、夜はもう大分冷える。ぼくは上着の襟を立てて、首をすくめながら本を読む。本を読むだけなら家で読めばいいって言われそうだけど、ぼくは外で読むのが好きなんだ。家の中だと空気が動かない。読んでいてもなんだか心が動かない。少しくらい肌寒くても生きている空気の中で読んでいると、心がだんだん躍り出してくる。物語の世界に入って、何でも出来るような気がしてくる。

「本の木の森」の主人公は、ぼくと同じくらいの少年だ。少年はこれから冒険に出かけるのだ。その少年に本の木は言う。私とお前は、いのちの深いところであつながつている。お前が危機に陥ったとき、お前はいつでも私のところに帰って来ることが出来る。大きな木の下に立って「ロハナエシヤナスタ」と三回言うのだ。少年はそれを胸にしまって旅に出る。「ロハナエシヤナスタ」。変な呪文だ。ぼくは空を見上げた。星が瞬いている。今夜はとても天気が

良くて、月もない。ここは公園の真ん中で街灯はあるけれども、街の明かりもあまり見えないところだから、星がとてもよく見えるんだ。

ぼくは本を閉じて、空を見上げる。「ロハナエシヤナスタ」。口の中で言ってみる。言っているうちに自分のやっていることがおかしくなってきた、つい笑ってしまふ。

ぼくは、公園の中で一番大きな木の下に行く。ヒマラヤスギだ。空に向かって、まっすぐに伸びている。本の木の森へ行ってみたい。ぼくは思う。いけな

いいけない、これはお話なんだ。ほんとうに信じちゃってどうする、子どもじゃあるまいし。

でも子どもっぽいかもしれないけど、おまじないを唱えるくらい、いいだろう。誰も見ていないから、恥ずかしくないし。

ぼくは本を胸に抱いて、「ロハナエシヤナスタ」と三回言ってみた。

なにも起こらない。そりやそうだよな。ぼくはちよつとがっかりして、もう一度本を開ける。すごい。星明かりで本が読める。もちろんとても暗いけど、



文字がうつすらと見える。ぼくは星の光をたよりに、呪文のページを読む。星の光で見るだけで、さつきとは全然違ったページに見える。本の木は言う。

「この呪文を唱えるときは、心を澄ませて、心の中を真っ白にして、私のことを思い浮かべながら言うんだよ。ロハナエシヤナスタ、ロハナエシヤナスタ、ロハナエシヤナスタ。一度目よりも二度目の方がゆっくりと、そして三度目の方がもっともつとゆっくりと。」

ぼくは本を閉じて、本を胸に抱いて、目をつぶった。心を澄ませるんだ。だんだん心の中の霧が晴れていく感じがする。なぜか目の前にいろいろな人の顔が浮かんで来た。お母さん。先生。お父さん。ゆいちゃん。そして心の中の本当に遠くの方に、見たこともない本の木の姿が、ありありと見えて来た。

「ロハナエシヤナスタ、ロハナエシヤナスタ、ロハナエシヤナスタ。」

一度目よりも二度目の方がゆっくりと、そして

三度目の方がもつともつとゆっくりと。言われた通りに呪文を唱える。三度目のロハナエシヤナスタを唱えているうちに、誰か知らない声が同じ呪文を唱えるのが聞こえて来た。

ぼくはびっくりして目を開けた。

ぼくは空を飛んでいた。風は感じない。ぼくは星空の中を飛んでいる。下を見ると、あの大きなヒマラヤスギが見える。ぼくは空を飛んでいる。ぼくは驚く。ぼくは飛んでいる。呪文は本当だったんだ。

ぼくはどんどん高く舞い上がっていく。星空がどんどん近付いて来る。ぼくは、ぼくが何か柔らかい光の中に包まれていることに気がつく。だんだん周りが明るくなってくる。白いぼんやりした光に包まれている。ぼくはどこまでも飛んでいく。気がつくと周りは明るくなってきて、ぼくはたくさん葉っぱのついた木のしげみの中にいた。枝の隙間から青空が見える。ぼくは白い光に包まれて、地上に降り立った。やがて白い光が消えると、ぼくは大きな木の下にいた。

さわわ、さわわ。木は風に吹かれて、葉摺れの音を立てている。

ぼくは緑の丘の上にいる。丘の麓には大きな森が広がっている。ぼくは木を見上げる。緑色のボールのような、大きな実がいっぱいになっている。かさかさ、という音がして何かが走る。リスだ。リスは実の皮をひっ搔いている。と、落としてしまった。リスはきいきい鳴いている。ぼくは実を拾う。リスのひっ搔い

たところから、中に種が見える。胡桃だ。

「すごいや、本物の胡桃の実だ。」

ぼくは柔らかな果肉を剥いで、中の胡桃を取り出す。

「桃の種みたいだ。胡桃って種なんだな。」

ぼくはボールのような胡桃の実を見るのは初めてだ。中身の胡桃はもちろん食べたことはあるけど、殻のままの胡桃を見たのは、お父さんがお土産に持って来てくれた時以来だ。

「それじゃあこれは、本当に物語に出て来た本の木

なんだな。」

ぼくは木の上を見上げる。これが本当に本の木なら、この木に登って高いところへ行けば、見たこともない本がなっているはずだ。

ぼくは本をかばんに入れて、大きな幹に抱きついて、木に登り始めた。木のぼりなんて初めてだ。どうやったらうまく登れるんだろう。ぼくはずり落ちる。足がかりになるところがないか、探してみる。よく見ると根元から一メートルくらいのところに足掛かりになるくぼみがあり、頑張ればそこまでは登

れそうだ。ぼくは力を振り絞ってそこまで登り、上を見ると、また手掛かりになるくぼみがある。ぼくはそうやって、一番下の大きな枝まで登る。

「わあ、すごいや。」

そこは地面からは二メートルくらいの高さだったが、もう木の下で見た時とは全然景色が違う。ぼくは面白くなって、枝をつかんでどんどん登って行った。枝の上ではリスたちが盛んに走り回っている。ぼくという闖入者を見て、戸惑っている。

「ごんちは。」



リスは逃げる。ぼくはなんだか可笑しくなつて、  
声を出して笑いながら木を登って行く。

どンドン登って行くと、空が見えて来た。下を見  
ると、丘の下の大きな森が見渡せた。その向こう  
には畑が広がっていて、小さな家々が並んでいる。  
ぼくは本当に本の世界に来たんだ。やったやっ  
た。ぼくは嬉しくて叫びたくなった。

上を見上げると、大きな木の葉に包まれたもの  
がいくつもぶら下がっている。登って行って、それを

手に取ってみると、それは本に書いてある通りのこの世に一冊しかない本だった。ぼくが本を手にとると、その本は自然に枝から離れる。茶色い革の表紙のついた、わくわくするような素敵なお本だ。ページをめくるとそこには不思議な文字が書かれていて、円と三角の図がいくつも載っている。

「これは数学の本なんだ。でもこの文字は見たことがない。」

ぼくは図形を眺めながら文字を見る。どうやら、この言葉が円という意味らしい。それから、おそら

くこれが直線という意味だな。そう思いながら本  
を読んでみると、おぼろげながら書いてある内容が  
わかってきた。どうしてだろう？ぼくは変な気持ち  
になる。

もう一冊、近くにある本を取ってみる。どうやら、  
この本はその言葉を学習するための本らしい。口  
の形の絵が書いてあって、文字が書いてある。どう  
やら、この文字が「あ」という音で、この文字が「お」  
という音だな、と思いながら読んでいるうちに、音  
の法則がだんだんわかってきた。ぼくは面白くなっ

てそれに熱中しているうちに、その本に書いてある文字は大体発音出来るようになっていた。本の後ろの方には、大きな文字の下に絵が描いてあり、その絵をあらわす言葉らしきものが書かれているページが続いている。これは子どもどころひらがなを覚えた、あの積木と同じだ。ぼくは一生懸命言葉と文字を発音しているうちに、いつの間にか自分がその言葉で考えながら読んでいることに気がつく。ぼくは驚く。

ぼくはもう一冊の本を手にとってみる。それは、

「本の木の森」の中に出て来る話で一番読んでみたかった、白い服を着た海のそばの街に住む少女の話だ。ぼくは覚えただけのその言葉で、お話を夢中になって読む。

きいきい。きいきい。

ぼくの耳のそばでリスが鳴いた。気がつくと太陽は大分傾いている。急にぼくは不安になる。これからどうすればいいんだろう。

でもここが本の中の世界なら、本の中にヒントがあるはずだ。ぼくは、「本の木の森」の話を一生懸命思い出してみた。

そうだ、この丘の麓の森の中に、「森の木の家」があるはずだ。とりあえずそこへ行ってみよう。ぼくはそう思って、この木で取った本を三冊かばんに入れて、木を降りた。慎重に、慎重に。日が陰って、足場が見にくい。一番下の枝まで来た。その下の足場はよく見えない。ぼくは思い切って飛び降りた。枝が揺れて、リスたちがきいきい鳴いた。よかった、

無事着地した。ぼくは木の上の方を眺めた。それから遅い午後の空を眺めた。

ぼくは本の木の世界に来てしまったんだ。心細さが襲って来た。でもぼくは、えい、と思って丘を下って行く。

森の中は静まり返っている。ほう、と鳥の音がする。道らしい道がない。ぼくは迷った。このまま進んでいいんだろうか。それとも本の木の下に戻ってみるか。心臓がときどきする。

「本を読んでみよう。」

ぼくはかばんから「本の木の森」を取り出して、森の木の家が書いてあるところを探した。「森の木の家は森の真ん中の木立の切れ目の、ちよつとした広場に面している。そこへ行く道は、ない。でも、近づくともっとケーキの匂いがして来るので、それをたよりにみんなが集まってくる。」ぼくはくんくんとあたりの匂いを嗅いでみる。森の匂いはするけれども、ホットケーキの匂いはしない。

ぼくは地面を見る。誰かが通った足跡はないかと



探してみる。ぼくはしやがんで、じつと耳を澄ます。すると、遠くでかさかさ、つという音が聞こえる。そつちを見ると、鹿の大群が走っていた。あんなわずかな音なのに、あんなたくさんの獣たちが。ぼくは怖くなった。鹿だったらいいけど、もっと大きな動物に出会ったらどうしよう。足がすくむ。

ぼくは膝を抱えてうずくまった。心臓の音がいやに大きく聞こえる。

落ちつけ、落ちつくんだ。

ぼくは自分に言い聞かせる。こういうときは、心

を澄ませるんだ。そうしたら答えは自然と現れる。そう本に書いてあった。ぼくは大きく息を吸い込んで、そして吐く。それを三回繰り返す。だんだん、心が落ち着いてきた。ぼくは立ち上がって、もう一度あたりを見回す。こっちへ行こう。

分厚い森の道を不安な気持ちを抑えてぼくは歩き続ける。ふと気がつくと、どこかで誰かがぼくを呼ぶ声がある。誰だろうか？ぼくはあたりを見回す。わからない。どこかで聞いたことのある、女の人の声だ。ふと、目の端に女の人の白い服が見えた気

がした。ぼくはそちらの方へ歩いてみた。歩いているうちに、ぼくは少し勇気が出て来たことに気がついた。

急に森の影が切れた。空はもう夕方の色になりかかっている。そこは森の中の広場だった。どこからかホットケーキの匂いがしてきた。よかった！近くまで来たらしい。お互いに枝が絡み合った三本の大きな木の横を抜けると急に視界が広がって、正面に丸太を組み合わせて作られた一軒の家が見えた。家の煙突からは、白い煙がたなびいていた。

「ここが森の木の家だろうか。」

ぼくは緊張して、その家の入口の前に立った。入口には、大きな呼び鈴がついている。ぼくはその紐を引っ張った。からんからん。派手な音がしてぼくは心臓が止まるかと思った。やがて人の気配がしたかと思うと、のっそりとおじさんが顔を出した。

「おお、リンか。呼び鈴など鳴らさなくていいのに。」

おじさんはそのまま中に戻って行こうとした。

「あ、あの。」

「なんだ？」

「森の木の家のおじさんですか。」

おじさんは目をぱちくりさせた。

「なにを言っておる。」

「あの、ぼく、レイです。リンって言う人じゃ、ないんです。」

おじさんは不思議そうな顔をしてぼくの顔を見た。

「なんだ、新手の冗談か？お前はいたずら好きだから油断ならん。」

「あの、ほんとなんです。ぼくはレイって言います。今日、初めてこの世界に来たんです。」

おじさんは目をぱちくりさせ、やがて大声で笑い出した。

「初めてこの世界に来たって？じゃあどうしてこの家を訪ねて来たんだね。」

「本に書いてあったんです。」

ぼくは本を取り出して、おじさんに見せた。

「なになに……これは知らない文字だな。わしには読めんよ。」

「そんな。おじさんだつて日本語でしゃべっているじゃないですか。」

突然気がついてぼくは飛び上がった。ぼくは日本語でしゃべってない！さつき覚えてばかりの、不思議な文字の言葉でしゃべっている。

「どうした？お前はこの文字が読めるのかね。」  
「読めますよもちろん。ほらここに。本の木の生えている丘の麓に、大きな森があつて、それは本の木の森と呼ばれているつて。そしてその中に森の木の家があつて、おじさんが住んでるつて。おじさんはひげ

もじゃで、黒い眼鏡をかけていて、パイプを吸っているって。」

おじさんは目をぱちくりさせた。

「どうもよくわからんのう。お前さんはわしのことを知っているみたいだが、なのにリンではないという。お前は何かの悪い霊で、リンの体に乗っ取りでもしたのか？」

「そんな。ぼくはそんな悪い霊とかじゃありません。ぼくはレイなんです……あれ？あの、悪い霊じゃなくて、いいレイなんです。いや、霊じゃなくてレイな



んです。」

おじさんは吹きだした。

「分かった分かった。中にお入り。ゆっくり話を聞かせてもらおうじゃないか。」

ぼくはようやく肩の力が抜けて、ふうつと息をした。涙がこぼれそうになる。いけない。知らない場所に来て、心細いからと言って泣いたりしたら、自分がわからなくなってしまう。そんな気持ちに心を奪われないようにしないといけない。

ぼくはおじさんの後ろから、家の中に入って行

く。

家の中は、喫茶店のようになっていた。テーブルがいくつも置かれていて、周りの壁は一面本棚になっていて、その本棚全部がびっしりと本で埋まっている。

「すごい本ですね。」

「そうじゃな。どういうわけだかわしのところにはたくさんの本が集まって来てな。いくら本棚を作っても足りやしない。この他にも、地下にも書庫を作

ってあるんじゃないよ。お前さんも本が好きかい。」

「はい、とても。」

「そうか、それもリンと同じじゃない。」

おじさんはカウンターの中に入った。

「何か食べるかね。お腹がすいとるじやろう。」

「ありがとうございます。」

「ちようどホットケーキが焼けたところだ。飲み物は何かいい。」

「何か暖かいものを。」

「じゃあ、リンの好きなホットレモネードを作ってや

ろう。」

おじさんはカウンターの中で、手際良くホットレモネードを作ってくれた。

「じゃあ、お前さんの話を、ゆっくり聞こうじゃないか。」

ぼくは自分のことを話した。郊外の住宅地にお母さんと二人で住んでいること。お父さんは長い間外国に行っていて帰って来ていないこと。学校へ行っていないこと。本を読むのが好きで、朝から晩

まで読んでいること。「本の木の森」の物語を読んで、本の木の教える呪文を唱えたら、本の木の下にやって来たこと。本の木に登って、新しい本を三冊、取って来たこと。おじさんは、うなずきながら聞いている。

「新しい本を、ちよつと見せてくれんか。」

ぼくはかばんから三冊の新しい本を取り出した。

おじさんは眼鏡を動かして、本をじつと見た。

「これは数学の本じゃな。…ふんふん、これは学習のための本じゃ。最初は簡単な図形の問題が書い

であるが、だんだん難しくなっていて、最後には「力」について書かれておる。」

「「力」って、何の力ですか？」

「お前さんがこの世界にやって来た「力」じゃ。」

「魔法ですか？」

「お前さんは魔法を信じるかね。」

「分かりません。でも実際にこうやって呪文でこの世界に来てみると、いったいどういふことが起こったんだろうって不思議で。この本を読めば、その力のことが分かるんですか？」

おじさんはうなずいた。

「その時がくれば、わかるじやろう。」

「その時って、いつなんですか。」

「お前次第じゃ。」

「……。」

「二冊目は…おう、これは。」

おじさんはしげしげとみて、本を光にすかした。

「ぼくはこの本を読んで、ここの言葉を話せるようになったんです。」

おじさんはぼくを見て、大きくうなずいた。

「この本には「力」がみなぎっておる。わしらの言葉を知らない者も、読んでいるうちにしゃべれるようになる。すごい「力」じゃ。」

「そんな力が…」

「それはそう難しいものでもない。人間には、言葉を覚えるのが早い者もいれば遅い者もいる。そこにはちよつとした秘訣とか素質とか言うようなものがある。この本は、読む者の奥底からそういうものを呼び起こしているだけじゃ。つまり無いものを作り出しているのではなく、種のあるものを育ててい



るだけなのじゃ。だがいい力じゃ。あの木の力がまっすぐに感じられる。これを読めば、この世界に迷い込んで来た者も、こうやって話が出来るようになる。素晴らしいことじゃ。」

ぼくは自分が褒められたような気がして嬉しくなった。

「また、取ってきましようか？」

おじさんは、ぼくの方に向き直って言った。

「そういうことは、安売りしてはいかん。」

「安売り？」

「あの木から本を取って来るといふのは、特殊な能力なんじゃ。誰にでも出来ることではない。」

「そんな、木に登るのは大変かもしれないけど、そこにあるものを取って来るだけじゃないですか。」

「同じものを探しに行っても、探し出せる者とそうでない者がおる。地下に何が埋まっているか、分かる者とそうでない者がおる。それと同じじゃ。」

「でもぼくは、本を取って来たら誰かの役に立てるといふことじゃよ?。」

「馬鹿者。」

驚いておじさんの顔を見ると、おじさんは真っ赤になって怒っている。

「お前はそんなものを取って来て、どうしようというのじゃ。」

「だって、その本みたいにこの世界に迷い込んで来た人の役に立てるなら……」

「褒められたいのか？」

ぼくは血が顔に上るのを感じた。

「いや、別に……」

おじさんはため息をついて言った。

「多くの人間が、人に認められたい、褒められたい  
と思っておる。認められるためなら何でもする。し  
かしそれではいかん。それは、奴隷の生き方じゃ。  
褒められたら喜んで、貶されたら悲しんで、それで  
どうなるというんじや。」

ぼくは頭に血が上った。どきどきして、何も考え  
られない。

「お前はそれではいかん。お前は自由に生きねばな  
らん。そんな力を持つ者が、人に流されて生きてい  
たら、世界はすぐに間違った方向へ動いてしま

う。」

「ごめんなさい。」

「謝ればいいというものではない。それにお前は、何に對して謝っているんじや？怒られたから謝っているだけじやろ。今はまだ分からんかも知れん。だから何も言わなくていい。ただわしの言うことを覚えておきなさい。お前は御用聞きではないんじや。」

「じゃあ、人のいうことは聞かなくていいということですか？」

おじさんは、ぼくの目を見た。ぼくは顔から血の

気が引いていくのを感じた。

「その通りじゃ。」

「え？」

声が出ない。変にかすれたような声になった。

「お前には、わしの言っていることがわかるはずじゃ。わしはなぜなぜをしとるんではない。お前は聞くべき声を聞かず、聞かなくてもいい声や聞いてはならない声を聞いておるかもしれん。だが、どういう気持ちがお前をここに導いたのか、それをいつも思い出さなければならん。お前はここに、御用聞きにな

るために来たんじゃないじゃろ？ここに居場所を見つげるために来たんじゃないはずじゃ。どうしてお前はここに来たんじゃない？」

「本を、読みたくて。」

「そうじゃろ。」

「落ち着いて、じっくり、誰にも邪魔されないで、本を読みたくて。そしてその本のことを誰かと話し合いたくて。」

「そうじゃろ。だから、どうしたらいいか分かるじゃろ？」

「読みたくなったら、取りにいけばいいんですね？」

「そうじゃ。あの木には、お前の求めている本がある。お前が本当に必要とする本がある。その本が、誰かのための役に立つのは、たまたまじゃ。結果を求めたらいかん。結果は結果でしかない。もう死んだものじゃ。」

「結果は、死んだもの？」

「求める気持ちを持ちなさい。そして感謝する気持ちも。その両方が、お前にすべてのものをもたらすんじゃ。」



「よく分かりません。」

おじさんはため息をついた。

「そうじゃの、一度にたくさんのことを言いすぎたかも知れんの。」

ぼくはちよつと落ち着いた。「分かりません」という言葉がぼくを落ち着けた気がした。

「三冊目を見せてみなさい。」

ぼくはおじさんに、海の街に住む白い服を着た少女の話の本を渡した。するとおじさんの顔色が変わった。

「その話、とつても面白かったです。まだ最後まで読んでないけど。」

「この本を取って来てしまったのか…」

おじさんは本を両手に取って、深々と頭を下げた。畏れと祈りの混じった表情だ。ぼくは不安になった。

「なんか、いけない本を持って来てしまいましたか？」

「いや、そんなことはない。」

「でも、どうして…」

「なんでもない。」

「とてもわくわくする話で、ぼくこの女の子に会ってみたいなと思って。」

おじさんはぼくの顔をまじまじと見、そして一人で合点したようにうなずいて言った。

「近いうちに会うことになるじやろう。」

「ほんとですか？」

心臓がどきんとした。

「このことは言うべきかどうか迷ったのじやが、やはりちやんと言うっておかなければならんじやろう。本

の力には、いろいろなものがあるが、持って来た本によつてはその人間に試練をもたらすものがある。

この本もそういう本の一つじゃ。」

「試練？」

「どんな試練かはまだわからん。だがこの世界のためにも、お前自身のためにも、必要な「そのとき」が近づいているのじゃ。そしておそらく本の木は、そのためにお前を呼んだんじやろう。」

「ぼくが、本の木に呼ばれたんですか？ぼくがこの世界に来ることを望んだのではなくて？」

「それは究極においては同じことなんじゃ。林檎が地面に引かれるように、地面も林檎に引かれておるんじゃ。」

外が急にざわざわし出した。ばらばらと家の屋根に何か当たる音がし出した。

「雹が降ってきたようじゃ。」

「ヒョウ？」

「氷のかたまりじゃよ。」

その時、急にボタンとドアの開く音がして、男が入って来た。

「コトウさん。リンのやつ、来てないか。」

「リンは来とらんようじゃぞ。」

「ようじゃ？どういうことだ？あれ、リン、いるじゃないか。こんなところで何をしてる。」

「ぼく、リンという人じゃないんです。」

「リンじゃない？何を言ってるんだこの忙しい時に。」

仕事をほっぽり出して一日どこへ行ってた。」

「ぼ、ぼくは…」

「まあまあタカノ。そう頭ごなしに言うな。」

「でもコトウさん。こいつの脱走は今週もう三回目

なんですよ。」

「脱走と言っても、ここに来るか本の木に登るかくらいじゃろ？」

「まあそうなんですがね。でも三日前には海から来た白い服を着た女の子がどうこうと言ってふらっといなくなっちゃって、たまたま海から来たお客がこいつを見たって話を聞いたから捕まえにいけたものの、丸一日潰れちゃった。」

「相変わらずじゃの。」

おじさんはおかしそうに笑った。

「笑いごとじゃありませんぜ。たんす作りも今が一番忙しい時期ですからね。こいつがいないと困るんです。」

「まあまあ、タカノ。この子はまた例の病気が出てちよつと混乱しているようじゃ。現実と夢の境目がわからなくなつて、自分はリンじゃないと言っている。」

ぼくは驚いた。

「ぼくはリンじゃありません。レイです。」

「何だ、新手の病気だな。仕方ない、コトウさんと



もう少し話をしていけ。飯の支度は出来ている。あんまり遅くならないうちに帰れ。」

ぼくは何を言っているかわからず、沈黙した。

「返事は！」

「は、はい。」

リンの父さんはふうつと息を吐きだして、おじさんに向かって言った。

「いつも御厄介かけますが、どうぞよろしくお願いします。」

リンの父さんはそう言って、外に出て行った。

「ぼくはリンじゃなくてレイです。おじさんまでそんなこと言うんですか。」

「ううむ。タカノは魔法とか力とかを信じない性質でな。彼に分かりやすいように説明しようと思ったんだが、返って話をややこしくしてしまった。少し厄介なことになったぞ。」

「厄介って？」

「お前はリンと呼ばれて返事をしたじゃろう。」

「うん、なんか勢いに押されちゃった。」

「あの言葉で、力が動き出したんじや。」

「力が？」

「お前は这个世界では、リンになったんじや。」

「え？」

「お前は名前の力に縛られたんじや。」

「でも、じゃあ、本当のリンはどうなったの？」

「わしにもわからん。だがこれから起こる試練に、

何か関係しているのかもしれない。」

「でもぼくはレイですよ。リンじゃなく。」

「ちよつと左腕の袖をまくってみなさい。」

ぼくは左腕の袖をまくった。すると、左のひじの上のところに、長く大きな傷のあとがついている。ぼくは驚いた。

「なんだ、これ？ぼくはこんなところ、けがをしたことない。」

「その傷は、リンが四歳の時、馬から落ちてついた傷なんじゃ。たまたま落ちていた鋭い石で腕を切ってしまった。あのときはタカノが慌ててここに運んで来たんじゃないが、わしの力でも傷は残ってしまった。」

「おじさん、お医者さんなの？」

「いや。リンの父さんもそう思っているがの。わしはたまたま手当の方法を知っていたただけじゃ。」

「でもどうしてぼくにこんな傷が？」

「お前は肉体まで、リンになったということじゃ。」

「そんな。」

「鏡を見てごらん。」

おじさんは壁の鏡を指さした。ぼくは走って行って自分の顔を見る。思わずあつと声をあげた。

ぼくじゃない！ぼくに似ているけど、ぼくじゃないな

い！

「レイは、リンとよく似ておる。でも自分で見ればその違いはわかるだろう。お前は这个世界で、リンとして生きなければならん。」

「でも、ぼくはレイなんです。」

ぼくはだんだん涙声になってきた。おじさんはうなずいた。

「そうじゃ。だがそのことを分かっているのは、この世界にお前とわしだけなんじゃ。だから、お前はそ

のことを忘れてはいかん。」

「忘れるはずありません。」

「そうかの？人間、案外簡単に自分が誰だったかを忘れてしまうものじゃ。誰かに褒められたり、必要だと言われたり、いじめられたり、仲間外れにされたりしているうちに、自分が誰なのかわからなくなっていく。お前は、お前がレイでありたいのなら、自分がレイであることを忘れないようにしなければならんぞ。誰も頼りにはならないのだ。」

「おじさんも？」

「わしにだって何が起こるか分からんからのう。もしわしがいなくなったら、自分が誰かを知っているのは自分だけになるんじゃないや。わかるか？」

それは考えるだけで恐ろしいことだった。

「そんな。おじさん。」

「これからお前に起こる試練では、何がどう動くのか、わしにもよくわからないんじゃないや。」

「試練……」

「お前は、タカノの家に行かなければならん。」

「え？」



「お前はリンになったのだから、タカノの家に帰らねばならんのだ。」

「どうして？ここに置いてください。」

「お前は、リンとして父親の家に帰るのだ。」

「ぼくはこの世界の人間じゃないんです。リンじゃないくレイなんです。お願いですからここに置いてください。」

「今はレイの話をしているんじゃない。リンの話をしているんじゃない。」

「でもぼくはレイなんです。」

ぼくは「本の木の森」の本を手にとって言った。

「この本を見ればわかるじゃないですか。この本には、この世界の人の知らない言葉で、この不思議な森のことが書いてあるんですから。」

心臓がときどきする。ぼくは大急ぎで本を開いた。するとどうしたことだろう。そのページからすると文字が浮き上がっていき、糸のような線が煙のように薄くなり、そして消えてしまった。そのページは白紙になってしまったのだ。

「あれ？あれあれ？」

「ページは閉じておきなさい。力が働いておる。開いてしまうと、そのページの内容は煙のように消えてしまふんじや。お前は、お前がお前であることを知っている、自分の世界から一緒に来た唯一の友を失いたくなかったら、その本はもう開いてはいかん。」

ぼくは呆然とした。

「お前は自分の力で、この世界で生きていかなければならんのじや。それが試練のはじまりなのじや。」  
ぼくは目を覆った。とんでもないことになってし

まった。

「まあ、泣くな。お前は元の世界に帰りたくなつたか？」

ぼくは首を振る。

「ぼくは前の世界に帰りたいとは思わない。でも、ぼくはぼくでいたいんだ。」

おじさんにはっこり笑ってうなずいた。

「お前には出来る。」

「でも……」

「お前は自分を過信してはならん。だがお前には

力がある。お前が自分の力を呼び起こして、自身を使いこなせるようになったら、お前は自由に自分のいる世界を選択することが出来るようになるじゃろう。そのためには、今は乗り越えなければいけないものがある。タカノの家に行きなさい。」

「でもあのおじさん、ぼくのことをリンと思っているし、それに……」

「恐いか。」

ぼくはうなずいた。

「心配せんでいい。あの男は、見た目よりずっとやさ

しい男じゃ。見てごらん。」

おじさんは窓ガラスの向こうを指さした。ぼくは窓ガラスに近寄って外を見た。すると、森の少し離れたところで、小さな赤い火がいたり消えたりしているのが見えた。

「タカノがあそこで煙草を吸っておる。お前を待っているんじゃない。」

「……」

「今日 は行きなさい。そしてリンとして生活するんじゃない。分からないことが多くても大丈夫じゃ。リン

はいつも突拍子もないことを言い出す子だから、みんな慣れておる。お前に合わせていろいろ教えてくれるじゃろう。」

「……」

「この本を持って行きなさい。」

おじさんは数学の本を出した。

「この本にはお前に必要なことが、きつとどこかに書かれている。分からなくなったら、また出来ないことがあったら本を読むといい。そうしたらお前には出来るはずじゃ。」

「ほかの本は…」

「ここに置いておくとよからう。」

「あの」

「なんじゃ。」

「この本も預かってくれますか。」

ぼくは「本の木の森」の本をおじさんに渡した。

「自分で持っておかなくて、いいのか？」

「自分で持っているのと、つい広げて見たくなりそうなんです。預かってくれませんか。」

「そうじゃな。」



おじさんは、「本の木の森」をカウンターの後ろの本棚の、金色の背表紙の本が並んでいる横に置いた。

「ここに来れば、ぼくを知っている人がいる。ぼくがぼくであることを証明する本がある。そう思っていれば、少しはましかもしれない。」

「まあ、思いつめるな。」  
おじさんは笑った。

目を覚ますと、ぼくは屋根裏部屋にいた。斜めに

なつた天井に開いた窓から、朝の光が差し込んで  
いる。窓の向こうに、大きな木が見える。ぼくはあ  
たりを見回した。ぼくは木のベッドに寝ていて、何  
枚か毛布をかけている。少し離れたテーブルには水  
差しとコップがある。ぼくはコップに水を入れて、思  
いつきり飲む。昨日の記憶がよみがえってくる。

ぼくはあれから、リンの父さんと一緒にこの家に  
帰った。帰った、と言っても初めて来たのだけだ。リ  
ンの母さんは暖かいシチューと黒いパンを食べさせ  
てくれた。ランプの下で、いろいろぼくに話を聞こう

としたんだけど、答えられることはあまりなかった。ぼくは記憶をなくしたんだ、と父さんも母さんも思った。

「まあ、働いているうちに記憶は取り戻すだろう。」と父さんは言って、

「とにかく今日はもう寝ろ。」  
と言った。

ぼくは母さんに屋根裏部屋に連れて来られて、毛布をかけてもらった。母さんは、本当のお母さんとは、違う匂いがした。

一人になると、ぼくは部屋の中を見渡した。部屋の中には、本棚があつて、その上に小さな人形が置いてあつた。手首を入れて人形芝居をするパペツトだ。サンタクロースのような赤い帽子をかぶっている。リンはどうしてこんなものを持っているんだろう。本棚には何冊か本があつた。その中に、白い服を着た海から来た少女の話があつた。ぼくはその本を少し読んだ。ぼくが取って来た本とは少し違う内容だった。ぼくはその少女のことを思い浮かべながら、寢床に入った。

ぼくは違う世界にやって来て、違う人間になってしまった。いや違う、ぼくはレイだ。ぼくは自分がレイである証拠を森の木の家に置いて来てしまった。でも何の証拠だというんだろう。ぼくがレイであることはぼく自身とおじさんが知ってる。そしてあの本は、開くことが出来ない。それならば何の証拠だというんだろう。何の必要があるというんだろう。そう考えていると、その考えはどこかさびしい、間違ったことのような気がしてきた。

そうじゃない。あの本は、ぼくの友だちなんだ。そ

うおじさんが言っていた。そう、前の世界からぼくと一緒に来たのは、あの本しかない。たとえ読めなくても、たとえ話しかけてくれなくても、友だちは友だちだ。ぼくには友だちがいるんだ。そう考えると、少しだけ気持ちが悪くなった。そしていつの間にか、ぼくは眠ってしまった。

ぼくはベッドから降りる。この世界の長い寝間着、森の人のような頭からかぶる衣服のまま扉を開け、階段を下りて行く。下からとんとんかんと音

が聞こえて来た。ぼくは音の方向に歩いて行き、扉を開けるとそこは工房だった。リンの父さんと、中年の職人と、若い職人の三人が働いている。

「やあ、リン、おはよう。」

中年の職人が言った。

「おはようございます。」

ぼくは口の中でもごもご言った。

「また行方不明になってたんだって？」

若い職人が甲高い声で言った。

「は、はい。」

ぼくはまごまごした。

「リン、だいぶ寝坊だぞ。早く着替えて来い。」

リンの父さんは長い板を手にしたまま、顔だけをこちらに振り向いて言った。

「…うん。」

ぼくは小声でうなずくと、部屋に戻った。ぼくはリンの服に着替えた。地味だけど丈夫な、職人の服だ。はじめて着た作業用の服は、ちよつと力が湧くような感じがした。ぼくは下に降りて行った。

「リン、朝ごはんくらい食べなさい。」



リンのお母さんが言う。

「うん。」

ぼくは昨日晩御飯を食べた小部屋に入る。

「よく眠れた？」

「うん。」

「なんだか元気ないね。」

「それでもないよ。」

「まあ朝御飯をおあがり。」

テーブルには丸ごとのリンゴと、暖かいオートミールと、カップに入ったあつあつの牛乳が置いてあった。

リンの母さんはソーセージと卵を炒めて、お皿によそってぼくの前に置いた。

「とにかく元気を出しとくれ。」

ぼくはソーセージをかじった。暖かい肉汁が飛び出して来て、ぼくは何となく切なくなった。右腕で目をこすって、ぼくは牛乳を飲んだ。

「どうしたんだいこの子は。ご飯を食べながら泣いたりして。」

「なんでもない。」

ぼくは「飯を食べ終わって立ちあがった。

「リンゴは食べないのかい？」

「うん。」

「お腹がすくかもしれないから、持っておいで。」

ぼくはリンゴをかばんに入れて、作業場へ行った。

「リン、昨日の続きだ。そのたんすを完成させてくれ。」

ぼくの目の前に、白い柔らかい木で出来たたんすの外枠と、作りかけの引き出しがあった。

「どうやればいいのかい？」

三人は動きを止めて、まじまじとぼくを見た。

「たんすの作り方、忘れちゃったのか？」

「ぼく、たんすの作り方なんか知らない。」

若い職人が駆け寄って来て、ぼくの額に触った。

「熱はないみたいだな。」

「ぼくは普通だよ。」

ぼくは若い職人を押しのけた。

「だけど三度の飯より本とたんす作りが好きなり  
んがたんすの作り方を忘れたなんて。」

「でも知らないんだもん。」

リンの父さんが言った。

「わかった。じゃあたんすはいい。ここにある木を運べ。」

「どこに?」

「裏の材木置き場だ。行けば分かる。」

ぼくは板を一枚持って、運ぼうとした。

「五枚持って行け。」

「そんなに持てない。」

「いいから持って行け。」

父さんは板をそろえて上と下を縛り、ぼくに渡し

た。ぼくは持ち上げようとして、よろめいて落としてしまった。

「何をやってる。」

ぼくは拾い上げた。重い。

「こんな重いのに……」

「何言ってるんだ。おとといは、二〇枚一度に持てたじゃないか。」

「そんな。」

ぼくは頑張って、力を振り絞って五枚を肩に担ぎあげ、ふらふらしながら作業場を出て家の裏に

回った。材木置き場がどこなのか見当がつかず、あ  
つちへふらふら、こつちへふらふらしながら、家の周  
りを探した。

「あれ、リン、働かされてるの？」

「サボってばかりだからな。」

「俺たちはもう終わったから遊びに行くぜ。」

「やーいやーいのろまのリンー！」  
ぼくはかつとした。

「のろまじゃない！」

「言い返したぞ。」

「なんか変だぞこいつ」

「文句あんのか？」

悪ガキたちがぼくの周りを取り囲もうとする。

「こら！ガキども！」

リンの父さんだ。

「うわ、タカノだ！」

「またぶん殴られるぞ！」

子どもたちはハエの子を散らすようにいなくなつた。

「ほら、さっさと置いて戻って来い。材木置き場はこ



「つちだ。」

父さんは板の後ろを持ってくれた。ぼくは肩から材木を下ろし、腰のところで支えて運んだ。

ぼくが材木を立て懸けると、父さんは言った。

「調子が悪いのは分かった。だけど、たんすは今日中に作らなければいけない。あの細工が出来るのはお前だけなんだ。ちよつとやってみてくれないか。」  
「そんな。」

「やっているうちに思い出すかもしれん。仕事は体に染みついていくものだからな。」

「無理だよ。」

「とにかくやってみろ。」

ぼくは駈け出した。

「リン！」

リンの父さんのため息まじりの声が聞こえた。

「仕方ないやつだな。」

ぼくは走った。するとそこに、屋根裏部屋から見えた大きな木があった。ぼくはその木に抱きついて、声をあげて泣いた。一人で泣いていると、だんだん

落ち着いてきた。鳥の音がする。ぼくは目を開ける。目を開けても、現実が変わっていない。

こんなところでやっていけるだろうか。それにリンは、思ったよりすごいやつだ。子どもなのに、あんなたんすを任されているなんて。リンの代わりなんて、出来っこない。ぼくはどうすればいいんだろう。

木を見上げると、梢が風にさわさわと鳴っている。ぼくは本の木を思い出す。

そうだ、ぼくは本を読みに来たんだ。なのになんで、こんなところでたんすを作らなきゃいけないんだ

ろう。

ぼくは、本の木の呪文を唱えた。

「ロハナエシヤナスタ、ロハナエシヤナスタ、ロハナエシヤナスタ。」

二度目は一度目よりもゆっくりと、そして三度目は二度目よりもっとゆっくりと。唱えているうちに、今度は二度目の途中から誰かの太い声がぼくといっしょに呪文を唱えているのがわかった。

気がつくとぼくは本の木の下にいた。

本の木は、昨日と同じように、風にさわさわ揺れている。木の下にはいくつも胡桃の実が落ちていて、その中のいくつかは胡桃の種が顔をのぞかせている。リスが木の幹を走り回り、下まで降りて来て胡桃の実をかじる。

ぼくは本の木を見上げる。ぼくは誰なんだろう。ぼくは悲しくなる。いや、だめだ。ぼくは首を振る。ぼくはレイだ。それを忘れたら、ぼくは何も出来なくなる。ぼくは本を読むためにこの木に来たんだ。木に登ろう。

ぼくは足場を探して、木によじ登る。昨日よりずっと登るのが上手になっていた。一枝一枝、きちんとつかんできちんと足で体重をかけて登って行く。

やがて昨日と同じ、本がなっていたところまで登って来た。新しい本はないだろうか。ぼくは見回す。さわ、さわ、さわわ。枝が風に鳴っている。でも本は、一冊も見えない。ぼくはがっかりする。

「なんだ。本がなっていない。せつかく本の木に登って来たのに。あーあ。」

ぼくは斜めになった大きな枝にからだをもたれか

からせて横になる。

「何してるんだろうな、ぼく。」

なんだかどうでもよくなってきた。ぼくは気が抜けてうとうとした。

「レイ。」

誰かが呼ぶ声がする。

「何？」

「レイ。」

「だから何？」

返事はない。ぼくははっとした。この世界で、ぼくをレイと呼ぶ人は、おじさん以外いない。

「おじさん？」

ぼくはあたりを見回す。でも誰もいない。

「私だ。」

「誰？」

「お前をこの世界に呼んだ者だ。」

「ぼくをこの世界に呼んだ？」

ぼくをこの世界に呼んだ誰か……？

ぼくははっとした。



「本の木？」

あたりの空気が少し変わった感じがした。

「本の木なんだね？話が出来るの？」

「お前に私の言葉を聞く意思があれば。」

「あるよ！ねえ、どこにいるの？」

「私はいつでもここにいる。人間と違って、木は歩くことが出来ない。」

ぼくはあたりを見回す。大きな枝がいくつも分かれて、ぼくはその上に座っている。

「不思議だ。ねえ、どうして話が出来るの？」

「本当に訊きたいのはそんなことか？」

ぼくは困った。

「わからない。でも昨日から不思議なことばかりあつて。」

木はさわさわと風に鳴っている。答える気がない時は、何も言わないらしい。

「ねえ、どうして本がないの？ぼくは本を読みに来たのに。」

木は笑ったようだ。

「どうして笑うの？」

「お前に必要な本は、もうお前は持っている。」

ぼくはかばんの中を見る。あの数学の本が入っている。

「この本？」

「お前には、やらなければならないことがある。」

ぼくは黙った。昨日からやらなければならないことだらけだ。

「本の木も、ぼくに何かやれっていうの？ぼくは本が読みたいだけなのに。」

「本を読むことは、生きる力になる。お前は本を読

んで、本の世界に浸るだけでは本当に生きたことにならない。お前は他にしなければならぬことがある。」

「みんなそう言うんだ。学校へ行けとか、働けとか。何でそんなことばかり言うの？本を読んでれば楽しいし、新しいことを知ることが出来るし、それに誰ともケンカしないで済むし。ぼくは一生本を読んでいられたらそれでいい。」

「新しいことを知るの楽しいか？」

「楽しいよ。ぼくはお話も好きだけど、知らないこ

とが書いてある本を読んで新しいことを知るのも好きなんだ。それに、自分がよくわからないことを大人に聞いても誰も答えてくれないけど、誰に聞いても分からないことが本にはみんな書いてある。だから本を読みたくなるのは当たり前だと思っただ。みんな、何で本を読まないのかわからない。それで馬鹿なことばかりやってるのかと思うとばかばかしくなる。」

「お前は、生きなければならぬ。」  
「ぼくは生きてるよ。」

「自分の力で生きなければならぬ。」

「だいたいは自分の力で生きているつもりだけど。」

本の木は笑った。

「ならばなぜ、私のところに逃げて来た。」

ぼくは頭の中がかあつとした。

「なぜって、それは。」

「お前は出来ないことから、逃げて来ただけだろ  
う。」

「逃げたって……だって、たんす作りなんて別にやりた  
くないもん。」

「やりたくないとは出来ないは違う。」

「出来たってやりたくないよ。」

「お前の持っている力で出来るならば？」

「だって。」

本の木は何を言っているんだろう。

「そんなこと、出来るわけない。リンになってみて、リンがどういう子どもなのかかわかったけど、リンですごいやつなんだ。あんなたんすを作ったり、あの重い板を二〇枚一緒に運んだり。そんなことやったこともないのに、出来るわけないよ。」

「お前はとうやってこの木の上に来た？」

「とうやってって……木を登って来たんだよ。」

「お前は今まで、木登りをしたことがあったか？」

ぼくは考えてみた。

「初めてだ。」

「やったことがないのに、出来たじゃないか。」

「……そうだね。」

「ではなぜ、最初から出来ないと思うんだい。やってみれば出来るかもしれないじゃないか。」

「でも木の登り方は、何となくわかったんだ。でも、



たんすの作り方なんて見当もつかない。」

「お前は、何を持っている？」

ぼくは自分の周りを見回した。

「この本？」

「お前に必要なことは、その本に書いてある。」

ぼくは本をめくってみた。昨日、最初に見たときにはちんぷんかんぷんだったこの本が、今は何が書いてあるのかすうっと入って来る。ぼくはページをめくっていった。森の中で迷子になったときに目的地を探す方法、こつちを見ていない人に自分があるこ

とを知らせる方法、いろんな方法が書いてある。と、あるページに目がとまった。たんすを作る方法。

ぼくはそのページを読んだ。目を走らせているうちに、ありありとたんすを作るいろいろな工程が目につかなくて、その場面でどういうことに気をつければいいか、どんなふうに力をかけてどんなふう調整すればいいか、そんなことまで分かってきた。

「どうだ。」

「作れるかもしれない。」

「そうだろう。」

「でも、何で？ぼくは今まで、金づちで釘を打ったこともないんだよ。なのになんでこんな難しいことが出来るような気がするんだらう。」

「お前はなぜ、この世界の言葉が話せるようになったんだい。」

ぼくははっとした。

「「力」が働いているの？」

木は愉快そうに揺れた。

「だんだんわかってきたようだな。」

「じゃあ出来ると言っても、ぼくの力じゃないん

だ。」

ぼくはちよつとがっかりした。

「そうじゃない。」

「どうして？」

「本の力は、無から有を生み出すことは出来ない。お前の中にある、もともと出来る力を呼び起こすただけだ。しかし一度呼び起こされたら、その力はずっと使うことが出来る。」

「でもそんなことが出来るなら、人間は無限に何でも出来るじゃないか。」

「その通りだ」

木が揺れた。空気がぴんと張りつめたような気がした。

「そんなことない。人は出来ないことだらけじゃないか。」

「しようと思わないことは出来ない。でも、出来ると思ったことは出来る。」

「うーん。」

ぼくは考えてみた。

「じゃあ、出来ると思うことが難しいんだね。」

木は愉快そうに揺れた。

「でもありがとう。少し心が軽くなったよ。」

ぼくは木を降りようとした。

「お前をここに呼んだのは、その話をするためではない。」

ぼくは木を見た。

「やっぱり、ぼくを呼んだの？」

「そうだ。」

「なんのために？」

「お前には、やらなければならぬことがある。」

「たんす作りじゃなくて？」

「たんす作りは、もうお前には問題なく出来るはずだ。お前がやらなければならぬのは、もっと困難なことだ。」

ぼくはおじさんが言っていたことを思い出した。

「試練？」

「そうだ。」

「どんな試練なの？」

風が吹いた。こずえは風にざわざわと鳴った。リスが縦横に走り回った。空の高いところで鳥が鳴い

た。

「お前は这个世界に、やらなければならぬ仕事がある。」

「二つ。」

「二つ目の仕事は、一つ目の仕事が終わった時に始まる。だから、一つ目の仕事が終わるまで、そのことは考えなくていい。」

「一つ目の仕事って……」

「それはお前はもう聞いている。」

ぼくは昨日のおじさんとの会話を思い出した。



「もしかして、海からやって来る白い服を着た少女と関係ある？」

木が揺れた。

「そうなんだね。でも、何をやればいいの？」

「それは仕事動き出せばすぐにわかる。」

「なら、本を読めばいいの？」

「海から白い服を着た少女の話は、よく似ているが違う話がいくつかある。」

「ぼくが昨日、「こ」から持って行った本と、リンの本棚にあった本だね。」

「その本も、リンがここから持って行ったのだ。」

「そうだったんだ。」

「リンは今、とても困難な状態にある。お前は、その苦境からリンを救い出さなければな

らない。」

「救い出す？どうやって？」

木の枝がさわさわと鳴った。本の木は答えない。

「それが試練なの？」

「第一の仕事だ。」

「ぼくは何をしたらいいの？」

「もうすぐ物語が動き出す。動き出したらその物語の流れの中で、お前が何をしなければならぬかは分かってくる。」

「リンはどこにいるの？」

「お前がそれを探さなければならぬ。」

ぼくは途方に暮れた。会ったこともないどこにいるかもわからない人間を探せだなんて。

「それにリンを救い出したら、この世界にリンが二人になってしまう。」

本の木は揺れた。本の木は笑っている。

「レイ、お前はリンじゃない。時が来たら、お前にかかっていた名前の力も消える」

「ぼくの体がレイに戻る？」

「そうだ。」

急に強い風が吹いた。ぼくは体ごと吹き飛ばされた。でも不思議に風は感じなかった。ぼくは丘の麓の大きな森を超えて、あつという間にリンの家の裏の大きな木の下に帰って来ていた。

本の木の森 第一部 森の木の家

<http://p.booklog.jp/book/42645>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42645>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42645>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.